

皇統の論理 山崎正之

——古事記についての一視座——

彼は要するに歴史そのものなのであり、幾度となく繰り返されるその章の一つなのだ。だから彼には顔がない。ヤン・コット

—

1 タギシミミの命はカムヤマトイハレヒコの命が東征出發前の、未だ日向に在る時に生れた。神武帝にとつては最初の子であった。東征完了後、畝火の橿原宮にて即位しあらためて太后を迎えた帝は、それから三人の男子をもつた。帝崩御ののち、タギシミミは亡父帝の太后イスケヨリヒメと結婚し、三人の異母弟たちを殺そうと謀った。理由は明確であるう、皇位継承者としての位置を確実なものとするために果たさねばならない緊急なプロセスなのだ。その計画を知ったイスケヨリヒメの苦衷は察せられよう。三人の皇子は母からのそれとなく事寄せた歌に事態の展開を関知、逆に攻めこんでタギシミミを殺した。現場には中兄のカムヤキシミの命と末子のカムナカハシミの命の二人が赴いたが、中兄は手足わ

ななきて行動に至らず末子によって遂行された。兄ではあるが譲る、と中兄が皇位継承有資格者からおりた結果、末子は第二代綏靖天皇となった。

2 タケハニヤス（ヒコ）の命は第八代孝元帝の子で、次代の開化帝の異母弟である。開化帝の子ミマキイリヒコイニエの命が第十代崇神帝となり、その時代にタケハニヤスは反逆を敢行した。しかし山代のワカラ河をはさんで両軍が対峙、相方で開戦の忌矢を放った時に、ワニの臣の祖クニブクの命の矢にあたりタケハニヤスは死んだ。

3 サホビコの王は開化帝の子で、崇神帝の異母弟である。同母妹のサホヒメは崇神帝の子イクメイリビコイサチの命が即位した第十一代垂仁帝の後であった。サホビコは妹の後に帝を殺せと迫った。帝が後の膝枕で寝込んだ時（——とは突如として描写された日常的な生態である。いわば天皇暗

殺の場の設定というクライマックスを、きわめて私的な夫婦生活の次元においてとらえていることは、それらの行為の人間的であることを物語っているとみられようを狙って帝の首を刺そうとするが、三度も振りあげながらなし得なかった。流れ落ちる後の涙に濡れかかり帝は目覚めた。そして后は一切を告白し、帝は直ちに軍を派してサホビコを撃ったが、彼はそれを予期してか稲城に籠り待ち戦った。后も宮中を逃れて兄のもとに走った。すでに身ごもっていた后は稲城で御子を生みおとすのであるが、その御子とともに后をも取り戻そうとした帝の計画は失敗に終わった。サホビコは殺され、サホヒメもあとを追って死んだ。

4 ヲウスの命(後のヤマトタケル)は第十二代景行帝の子で、八十王にも及ぶ数多の御子の中でワカタラシヒコの命・イホキのイリヒコ(命と並んで「太子(ひつぎのみこ)」であった。周知の、ヲウスが兄のオホウスをつかみひしぎ殺してしまふ経緯はいまおくとして、その余りにも壮絶な行爲と荒々しい心情に、父帝はヲウスの身近に在ることを恐れたものか、西征にひき続き東征へと派遣した。休むいとまも無く遠征に次ぐ遠征のなかで、ヲウスは孤独の死を死んでいった。それは明らかに帝による追いこみによるものとしなければならぬと思われぬ。

5 オシクマの王は同母兄のカゴサカの王と共に第十四代仲哀帝の子で、大后オキナガタラシヒメ(神功皇后)の生ん

だ太子オホトモワケの命の異母兄である。仲哀帝の突如の崩御後、后は新羅征討を果たし筑紫にて生んだ太子と大和に還り上ろうとした時に、オシクマの反逆がおこった。しかもそれは、オシクマが兵をあげる前にトガ野でウケヒ狩をおこない、兄カゴサカを失なうという凶事を受けながらの、思えば無謀ともいふべき行動であった(あるいはオシクマ一人になつたことで、ますます自分に有利な状況判断を持ったかも知れぬ)。が、事態の收拾はあつけないほど簡単に済んだ。后側の仕組んだはかりごととまんまとオシクマ方がかかってしまったために、オシクマは海に追いつめられて死んだ。

6 オホヤマモリの命は第十五代応神帝の子で、オホサザキの命・ウヂのワキイラツコと三人それぞれ異母兄弟の最年長者であった。帝は在位中に皇位継承者として三人中の末子ウヂのワキイラツコを指名したが、オホヤマモリは内心大いに不満であった。父帝崩御の後に、オホヤマモリは反逆の挙に出たのだったが、オホサザキの協力を得たウヂのワキイラツコの計略にしてやられ、空しく宇治川にその屍を浮かべるのである。(その後、ウヂのワキイラツコは皇位をオホサザキに譲って受けず、オホサザキまたそれを固辞するという場面が繰り返されるが、ここでは触れずにおく。)

7 ハヤブサワケの命は第十六代仁徳帝の異母弟である。帝の使者として同じく異母姉妹のメトリの女王の許へ出むき、帝との婚姻を乞うた。しかし女王は大后イハのヒメの嫉

妬の情の激しさに、すでに帝に召された同母姉のヤタのワカ
イラツメの不遇を申し立てて肯ぜず、あたかも帝へのつらあ
での如く自ら積極的に行動してハヤブサワケと結婚してしま
うのだ。この場合の経過は、およそ一方的にメトリの女王に
よって運ばれている印象である。帝の直接の訪問にも臆せず
わたりあい、あげくの果てに夫ハヤブサワケに対し叛逆をお
おりたてるような歌をうたう。結局はそのことが帝の怒りを
かって二人は追われる身となった。クラハシ山を経てウダの
ソニまで逃れ来たとき、軍隊に追いつかれて殺された。ここ
ではどこまでハヤブサワケ自身の意志がはたらいていたもの
か、ほとんど伺いようもないのであるが、叛逆の人脈として
はいささかも不自然でないことだけは確かであろう。

8 スミノエのナカツ王は仁徳帝の子で、同母兄のイザホ
ワケの命は次の第十七代履中帝、同母弟のタヂヒのミヅハワ
ケの命は第十八代反正帝、更に同母末弟のヲアサツマワクゴ
のスクネの命は第十九代允恭帝である。履中帝が大嘗祭で酒
に酔い寝込んだところで、スミノエのナカツ王は帝を殺そう
と宮殿に火を放った。臣下の救出によって帝は危うく難を逃
れたが、それあってか後日ミヅハワケの命の面会要請に対し
てスミノエのナカツ王と同じ心（叛逆の意志である）でな
いとのあかしを求め、それにはナカツ王を殺せという意向を
示した。いかに叛逆の徒とはいえ、ミヅハワケにとっては同
母兄であってみれば自らの手を下して事をなすのははばから

れたとみるべきか、ナカツ王の近習の隼人を誘いたばかり殺
させるのである。そのことを果たし得たならば自分が天皇と
なり汝を大臣とするであろうというミヅハワケの言葉は、何
ものにも代え難い響きをもって隼人の心を揺り動かしたこと
であろう。彼はいとも無雑作に厩に入った主君を矛で刺殺し
たのであった。といて約束の実現しようもないことであ
り、主君殺害の罪名において彼を亡き者とする計画をたてる
のである。そこでミヅハワケは仮官を造り、いつわりの即位
礼をおこなって豊楽とよあかりを開宴し、隼人が酒盞の大鏡で顔をお
おった時に彼の首を斬ったのである。隼人は幸福の絶頂で死
んだ。隼人を殺さなければ、ミヅハワケは間違ひなく彼によ
って殺されたであろうことは容易に想像できることである
う。

9 キナシのカル王は允恭帝の長子で太子であった。父
帝崩御の後に、同母妹カルのおホイラツメと道ならぬ恋愛沙
汰をひきおこした。それがおもてに頭わかれては、もはや皇位
継承がスムーズになされるはずもなかったのは当然である
う。百官ごとく太子に背き、同母弟のアナホの御子の側
に帰った。アナホの御子が軍を興して、カルの王の逃げこん
だオホマヘヨマへのスクネの家を包囲したという事態は、彼
がカルの王を滅すことによつて皇位継承者としての地位を不
動のものとする意図であることは疑いようもない。その経緯
を伝える語りくちのむしろカルの王たちに多分に同情的であ

るのは、どのようにもカルの王の太子への復讐のあり得ぬ状況がさせた一種の虚構化とみられなくもない。カルの王は捕えられて道後に流された。その後を追ったカルのオホイラツメ、ここまで来たとき二人のために残された道は一つしかなかった。すなわち死ぬことだけが二人の道程のすべてであった。

二

古事記という書物がいかなるものを志向した結果であるのか、いまそのことを深くは問うまい。記序の記す天武勅語のこれすなはち、邦家の経緯、王化の鴻基なり。故これ、帝紀を撰録し、旧辞を討覈して、偽りを削り実を定めて後葉に流へむと欲ふ。

との企図の、本書によってどこまで実現されたものであるのか、性急な結論を求めることもここでは避けなければならぬ。しかし、だからといって私がそうした事柄に無関心であるとか、故意に無視しようとしていることではないのである。

古事記という書物に対したとき、こちらに飛びこんで来る有無を言わせぬ一つの風景に、私は強くひかれるのだ。前節に摘記したいわば連続コマ写真の如きそれぞれの場面は、皇権をめぐる死の家の記録にほかならないではないか。それらの死は、いったい何のために払われなければならないか。それが

償なのか。そしてそれらの死が、そこでどのような役割を果たしているのか。執拗なまでに繰り返される確実な死への過程の、常にただ一つの論理によって導かれているといえることは、すでに明らかであると考ええる。それはまた、みな同じ顔を見せているということなのだ。いや、ヤン・コットに従えば、それこそ顔のないということとまったく同じだと言い得るはずのものである。

人はよく歴史は繰り返すという。だがそれはあらためて断わるまでもなく、現象そのものの図柄がなぞられ重ね合わされることではない。それらの現象を構成する論理的必然の上において、帰結して行くべき回路であることを証するものとしなければならぬ。そうとしかたどりようのないもの、ここでいえば、もっとも単純なかたちで勝利することを信じながら、その実、一度自らしかけた行動の結末は急坂を転落する石のそれと同じように、そこまで行きついてはじめておのれの場所に気づくのである。

かくして王権の座はいささかも動揺する様態もなく継承維持されて来たということであろう。確かにこの論理の範囲内にある限り、たといどのような形にせよ危うくせんとするものへの、徹底した断が用意されていた。そこでは、はっきりと歴史は繰り返されたのである。

ところで古事記の世界もようやく後半の部分を大方過ぎかけて、これまでになかった状況を展開してみせる。

キナシのカルの王を滅して皇位を手中に収めたアナホの御子——第二十代安康帝は、その在位中に殺害された。現役の帝の唯一の横さまの死として、それはまことに特異な風景であろう。臣下の讒言を信じて叔父にあたるオホクサカの王を殺し、その嫡妻だったナガタのオホイラツメを皇后とした安康帝は、後の連れ子であるマヨワの王に或る予感めいた危懼を覚えていたことではあった。ふと洩らした帝の言葉から父オホクサカの死の事情を知ったマヨワの王は、帝の部屋にしのびその寝首を搔いたのである。それが真昼の所行であり、しかも僅か七才の童子の仕業であったことは、歴史の秘める奥深さを遺憾なく示したものと銘記されなければならぬと思われる。事の経過で知られるように、マヨワの王は皇位篡奪を目的に行動したのではない。七才の童子に、皇位が何ほどの意味を持っていたであらうか。相手は現役の帝である前に父の仇であることだけが、その間の事情のすべてであったといっている。

しかし、測り知れぬ歴史の深淵をちらと垣間見させておいて、現役の帝の横死という異常事態の收拾のありようをめぐる、歴史は再びみたび、皇位継承の本来の展開に復帰して行くのである。ここに登場を見る安康帝の同母兄弟の末弟オホハツセの命——後に即位して第二十一代雄略帝——は、さまざまな意味でこれまでの克服されて来た条件・状況を集約した存在であったとみられよう。

オホハツセの命が即位した記事のところで、古事記は命の名を「大長谷若建命」とする。ここに付け加えられて来た「若建」の呼称は、どのような意味あいをもたらすものであるのか。

たとえば、前節の「1」で触れたタギシミミの殺害における直接の執行者カミヌナカハミミは、そのことよって「その御名を称へて、建沼河耳命と謂ふ」との伝えを持っている。「建」は文字通りの称讃の意味を冠して用いられたものだ。すでに記したようにタギシミミは異母兄であると同時に、いまは母の再婚の相手としてそこでは義父の位置にすらある。だが、それが如何なる存在であれ、こと皇権をめぐる対立抗争の場では他に決着のつけようはなかった——相手か・おのれか、「死」だけが終止符であった。

この場合、人間的という状況は果たしてあり得ないものだろうか、とふと考える。手足わななき行動のとれなかったカミヌナカハの兄は、単純に迫力のない臆病者とばかり言ってしまうえない面もありそうに思うのだが、すくなくとも本文でそのような考慮を認める表現は一切されていない。むしろ、それはここだけではなく、前節にみたとすべてに共通するところであり、むしろ峻厳に拒否すべきことを指示しているものかも知れぬ。タギシミミは殺さなければならない、それは一点の疑いようもない自明の事柄であった。とすれば、それを果たし得たものが勝利者なのであり、従ってカミヌナカハミ

ミの兄は敗者というしかなないであろう。つまり、そこには人間のものを含めて何ほどの心情も介在し得る余地を許さない、徹底した没個性的な世界があるばかりだった。

「建」の背景には、およそ以上のような意味内容を見出すことができるのではないか。ただし「建」本来のあり方として、「建速須佐之男命」の如きは一例になるのだろう。その系列のなかで前節の「4」にみたヲウスの命の、「熊曾建」によって奉られた「倭建命」という名称、また「出雲建」等の存在は、ごく一般的なケースのものである。「建」はもとより勇猛なる存在であって、その点では善悪というか理非曲直といった一方の側からの判断とは無関係であることがおもしろい。

そこで「大長谷若建命」の場合なのだが、即位前には「大長谷王子」「大長谷王」とあったのに、即位記事で何故に「若建」が付け加えられたのか、「若」はそのままの美称と置いて問題は「建」である。

マヨワの王による安康帝殺害は、周囲ではまったく予想しようもなかった突発事件だった。安康帝には皇子の系譜記事は載っていない。皇位継承に関しては帝の兄弟、すなわち兄のクロヒコの王・次弟のシロヒコの王、そして末弟のオホハツセの命、の中から出ること以外にはなさそうだ。古事記の語るところによれば、この事件のそもその起りは安康帝が末弟オホハツセのために結婚の世話をしようとしたことに

ある。それは帝のオホハツセに対する情のあり方を伝え、同時に関心の度合いをも示すといえるだろう。帝の死を知ってまず行動を開始したのがオホハツセであったことは偶然ではない。直ちに兄クロヒコの許に善後策の相談に駆けつけるのであるが、さして気にも止めていない風のクロヒコの態度に怒り、「その衿ころもくを握りて控き出して、刀を抜き打ち殺し」てしまふ。次兄のシロヒコも同じようだと怒ったオホハツセは、シロヒコを生き埋めにするのである。「腰を埋む時に至りて、兩つの目走り抜けて死」んだという。こうした凄絶な行為に比肩するものとして、ヲウスが兄のオホウスを殺したことを思い出すひとが多いと思われる。確かに両者の間にあるものに、共通・類似の傾向は指摘できるだろう。その迫力において十分に競い合い、また相手も同じく実兄であるという状況設定は一層その感を深くするはずだ。

しかし、いま一度オホハツセとヲウスと並べて見るとき、相方の立場に明白な相違のあることに気づく。オホハツセは兄二人を亡きものとするることによって皇位継承者の位置をおのれのうちに収めたのであり、ヲウスは前節に記した如く太子三人のなかの一人に定められており兄オホウスを狙う理由そのものを欠くのである。そしてこのことは、かなり重要なポイントになると私は考えているのだが……。

オホハツセに心底から安康帝の殺害犯人マヨワの王を討つ気持があったか、疑問なしとしない。オホハツセはマヨワの

王の逃げこんだツブラオホミの家を取り囲み、いったんは矢を射かけて討つ様子をみせはするが、途中から一人でツブラオホミの家を訪ね「我が相言へる嬪子は、もしこの家にありや」と問うのである。これがマヨワの王を討つための作略であるのだろうか。矛を杖としていたとあるのは、そこまでの配慮を示したもののなのか。二人の兄に對しあれほどの行為を果たし得た者が、臣下の楯があつたとはいえ七才の童子にむかい、これでは余りにも不申斐ないではないか。しかも結局マヨワの王の死には直接何ひとつ手を下していないことは、必要なのはその結果だけであつたとみられよう。

次いでオホハツセの従兄弟にあたるイチノベのオシハの王を殺すが、そのときには再び残忍ともいふべき行為に及んでいる。近習のつげぐちを簡単に信じて——皇位はわがものになつたと思つていたら、これは邪魔者があらわれた、履中帝の子であれば皇位を求めても不自然ではない、ここまで来て引き退るなどんでもないこと——共に早朝の狩場に出むき用意の通りにオシハを馬から射落し、更に「その身を切りて馬楯うまのたもとに入れて土と等しく埋」めてしまったという。彼の二人の男の子も逃げ去つて、オホハツセはすべての準備を完了した。古事記は直ちに雄略帝の即位を伝える。

かくまでしたたかな殺戮を敢行しなければ——いや、したからこそ、王権の座は彼のものとなつたのである。そして、その殺戮の過程そのものが「建」の呼称の付け加えられて来

た実体であつた。先に見たカミヌナカハミミの論理は、ここにおいても厳しく適用される。「人天皇を取りつ。那何かせまし」というのが、二人の兄に発せられたオホハツセの言葉の最初のものである。彼の関心の焦点の、奈辺にあつたかを明確に示す事実としてこれ以上の好例はないであろう。

続いての言葉として「一つには天皇にまし、一つには兄弟にますを、何か侍まへむ心も無くて、その兄を殺せしことを聞きて、驚かずて怠おろかなる」という。ここでもまず「天皇」であることを提示、もつとも「一つには……一つには……」との抜きの姿勢は肉親の兄弟をながしるに似たものではない。むしろそこには人間的な心情をみることでできる、切実な吐露がある。それが瞬時にして一転し、二人の兄を惨殺するに至ることとの結びつきは、どのように説明されるのか。しかし、おそらくいかなる説明も十分なものはなり得ないと私は考える。なぜなら、その時のオホハツセにとって「天皇の死」以外の悲劇なぞは、はじめから存在のしようもなかったからだ。カミヌナカハミミの場合また然りである。

ヤン・コットは、歴史についての見解に二つの基本的な型があると説く。その一つは「歴史には意味があり、客観的な目標を果たし、一定の方向に進んで行くものなのだという確信に基もとづいている。これは合理的な、少なくとも論理的に把握できる歴史観である」と言い、いま一つは「歴史は何の意味も持たず、静止している——あるいはたえず残酷な循環を

繰り返しているという確信に根ざしたものである。すなわち歴史とは、ひょうや嵐や旋風や生死と同じように、自然の力だということである」と記す。そしてコットは後者の考えに近かったものの例としてシェイクスピアをあげている。そこで次のように述べる。

シェイクスピアの史劇とは、歴史の巨大なメカニズムの登場人物のリストのことだといえる。だがこの巨大なメカニズム——玉座の下で活動を始め、王国全体がそれに支配されるメカニズムは、いったいどんなものだろうか。それは、貴族たちと暗殺者たちを歯車とし、人々を暴力と残虐と裏切りにかり立て、たえず新しい犠牲者を求めているようなメカニズムなのか。権力への道が死への道でもあるという法則に動かされているメカニズムなのか。シェイクスピアにとっては、この巨大なメカニズムとは歴史の秩序のことである。

いまの私にとって、これほど暗示的な文章はない。と同時に、歴史は残酷な循環を繰り返しながら僅かずつでも動いている、という感じがある。ただしそれが常に一定の方向だといえるかどうか、その点になるとよくは分らない。動いているといったのは、ある動きの振幅の範囲（その限りでは繰り返しと見ていい）にずれが生じて来る、その辺から別の要素の入る余地が認められるということである。コットの指摘する歴史の巨大なメカニズムとは、そこまで許容できる機構と

して理解してよいのではないか。

だいたひ話がひろがってしまったようだ。とはいえ、オホハツセをめぐる幾つかの事柄は集約的にコットの考察を可能にしていると思うのである。唯一無二の玉座への圧倒的執念は、血ぬられてこそひととき輝きを増して更に高く君臨する、その状況のなかでなまなましく躍動している。オホハツセワカケの命——雄略帝として即位後の話で、妻問いの途次たまたま見かけた宮殿に模した民間の邸宅を、怒って燃させてしまおうとしたことがあった。そのときの「奴や、己が家を天皇の御舎に似せて造れり」という言葉には、玉座に在ることの満腔の自信が露骨に示されているではないか。また葛城山の山中で一言主大神と出会った話があり、相手の行列が帝の鹵簿とそっくりであったところから「この倭国に、吾を除きてまた王は無きを、今誰れしの人ぞかくて行く」と、怒りの言葉を発している。あるいは豊楽の際の、三重の塚の非礼に怒ったが彼女の歌った天皇讃歌を聞いて赦すくだり、万葉集の巻一冒頭歌は周知のように雄略帝の作と伝えられているものであるが、そのなかで「……そらみつ 大和の国は おしなべて 吾これ居れ……」との詞句がある。そうした事態の間に浮かびあがって来る雄略天皇像というもの、単に一個のそれではなくて統合的な・トータルとしての像を結んでいるといえるであろう。かてて加えて古事記は雄略帝の没年令を「一百二十四歳」と伝え、まさしく最後の伝

承的古代帝王の役割を果たさせているとしなければならぬ。

ここで触れておきたいのは、皇位の占有する内実がどのよう
に定められていたのだろうか、ということである。前節の
「6」でオホヤマモリの反逆を見たが、天帝（応神）は生前
に三人の皇子について次の如く言い置いていた。すなわち
「大山守命は山海の政をせよ。大雀命は食国の政を執りて
白したまへ。宇遲能和紀郎子は天津日継を知らしめせ」とい
うのだ。

これと関連して思い出されることに、イザナキの神が黄泉
国より逃げ帰り日向の橘の小門のアハキ原で袂夜を行なっ
て、いわゆる三貴子——アマテラス大神・ツクヨミの命・タ
ケハヤスサノヲの命を生まれた際、アマテラスには高天原
を、ツクヨミには夜の食国を、ササノヲには海原を、それぞ
れ知らずことを指定したのである。このことを三権分治の思
想の反映とするとせよ、しないにせよ、三別することによっ
てそこに一つの世界の調和を見取っていたであらう。むろ
ん、神々の世界と現実の人間界とでは相違して来るわけだ
が、海・山に一つのイメージがあり、実際の政治面での分掌
を明確にうち出し、その他のところで天津日継が独立して来
るとき、皇権に荷寄せたものの実態について思いをめぐらさ
ないわけにはいかない。しかしそれを究明するためには、も
う一度記紀の神話体系の再点検から始められなければならない
のであらう。この場では、それがかなり祭儀的な関わりの

中で抽象化されている傾斜を認めるだけにとどめておこう。

権力の座に執ることの激しさは、いったい何に起因する
ものであるか。およそ古今東西を問わず、そうした状況の執
拗にくり返されてきたことを思えば、あらためて人間の所有
する欲望のおどろしいまでの深さ、そのなまなましい
蠢きに驚きを覚えるのである。むろん、古代と現代とでは権
力機構のヒエラルヒーに大きな差異のあることはいうまでも
ない。だが、そういう視点をぬきにしても、そこに写し出さ
れた図柄の等しさは、あまりにも見事である。

歴史の刻んできた軌跡からしほられる論理には、いささか
も空転の余地のありえようはすはなく、またそれらによつて
うち示されてくる未来図にもかなりのところまでの推察を許
すであらう。ということは、更にさらに同じ風景を眺めつづ
けなければならぬのが、とどのつまりは人間に課せられた
宿命のごときものなのかも知れない。

（追記・文中に使用したヤン・コットの文章は蜂谷昭雄・喜志
哲雄両氏訳『シェイクスピアはわれらの同時代人』白水社刊に
よる。）